

魔導士のヒーローアカデミア 別ルート

北方守護

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の作品の別ルートです。

多少設定が変わってる可能性があります。

目次

始まりと出会い。	1
第1話 新たな出会い	3
第2話 疑問	5
第3話 事情説明と模擬戦。	7
第4話 新たな生活と強さの意味	12
第5話 怒り。	15
第6話 不審者。	19
第7話 謎の人物。	22
第8話 正体。	25

始まりと出会い。

とある世界に住む者達に特別な力を持つ者がいた。
その力は魔法……そして魔法が使える者達を魔導士と呼んだ。
そして魔導士達が集い仕事をする場所をギルドと呼んだ。
これは、その世界で命を落とした者が新たな世界において生きる物
語である。

ある町にある山の中……
そこに1人の少年がいた。

「ん……んん……あれ？ここは……どこだ？」

少年は気絶しており目を覚ますと同時に状況確認を開始した。

「確か俺はクエスト依頼を受けてアイツらと一緒に……そうだ！」

少年は周りの匂いを嗅いだが……

「どういう事だ？……アイツらの匂いどころか何か初めて嗅ぐ匂いが……」

近くから一緒にいた仲間達の匂いがしなかった。

「そうだ『おい、誰かこの声が聞こえたなら上に魔法を放ってくれ……』何かノイズみたいな物が……ん？コレは……なっ！」

少年は念話テレパシーの魔法を使ったが何か雑音が入っており足元にあった物を見て軽く驚いた。

「こんな文字は見た事が無い……もしかして俺は違う世界に……ドゴォーン！ん？なんだあの音は……向こうからだ……まさかアイツらが暴れてる訳じゃ無いよな？」

少年は自分の状況確認をする前に音がした方に向かった。

それより少し前、少年が音を聞いた場所では……

「おいっ……このガキを殺されなくなかったら！金と車を用意するんだ！！」

両腕が大きく発達した男性が少女をその右手で握り潰そうとしており離れた場所では警官達が囲んでいた。

「くっ！離すノコ！……」

「へっ！テメエは俺が安全に逃げる為の人質なんだ！離す訳無いだろっ！」

その少女は茶髪のおカツパで目元が隠れていたが苦しそうな声をあげていた。

「くっ！警部！どうかして人質を救出しないと危険です!!」

「それは分かっているが、どうやって救出したら良いんだ……（近くの事務所に要請はしたが来る迄に時間がかかる……）」

「早くしろ！さも無いとこのガキがどうなっても良いのか!?!」

「アアーツ!!（嫌ノコ……こんな所で……誰か……）」ギリギリギリ

「はあ……何が起きてるのかと思えば、こんな事だったなんて……」

男性の近くにいつの間にも山中にいた少年がいた。

「なっ!?!テメエいつの間にもこんな所にいやがった!!」

「そんな事より、その子を離してもらおうかっ!!」ドゴン!

「ガハッ!」「キャッ!」

男性は少年に蹴飛ばされて近くの大木に当たったが少女は少年に助けられていた。

「おっと危なかったな大丈夫?」

「あつ、はい……大丈夫ノコ……（つて!この体勢ってお姫様抱っこノコッ!!）」

少女は自分の状況に気付くと顔を赤くした。

第1話 新たな出会い

少女を助け出した少年は今の状況を確認し始めた。

「えーっと、聞きたいんだけど君はコイツに襲われていたって事でよかったのかな？」

「は、はい！私が街を歩いてたら 危ない！」

少女に話を聞いてると声を掛けられたのでその場から離れると男性が襲ってきた。

「くそっ！ガキがふざけたマネしてんじゃねえ!!」

「別にふざけたマネはしてないけどね。危ない人がいたから助けただけだよ」

「ハッハッハッ！ガキのくせにヒーローの真似事をした所で俺様に勝てる訳ねえだろ!!」

見てると男性の右腕が巨大化していった。

「へっ！この俺様の個性【部分肥大^{ぶぶんひだい}】でお前ら2人ごと潰してやるよ!!」

「ん？個性って……魔法じゃないのか？まあ、潰される訳にもいかなーいからな……ねえ君」

「ふえっ!?な、何ノコ？」

「悪いけど危ないから背中の方に回ってくれるかな？」

「そんな事より逃げた方が良いノコ!!」

「コイツは俺たちを逃がす気は無いみたいだし、このまま放っておくと他の人の迷惑になるからな」

「ああ!?まずはテメエらをぶっ潰してやるぜ!!」グシヤツ!!

男性が右腕で殴り掛かって来たので少年は逃げる事は無く、そのまま攻撃を受けた。

「へっ、所詮はただのガキ……「フワアア……何をしたんだ？」なっ!? 何だと!？」

男性が少年達の様子を確認しようとしたが声が出たので見ると少年の体が金属の様に変化していて男性の拳を砕いていた。

「グワアア!?なんだ！テメエのその個性は!!」

「ん？お前の言ってる個性って奴が何か分からないけど、今度はコツチから行くぜ！鉄竜棍！」ドゴオン！

「ガハッ……一体？……」ガクッ

男性は少年が棒状に変化させた右手で殴り飛ばされて気絶させられた。

その後……

「ふう……困まれる前に逃げ出したけど、どうやらここは俺がいた世界とは違う世界みたいだな」

少年は警官達から事情を聞かれる前に、その場から離れた。

「けど、これからどうしたら「グウ」腹が減ったな……まあ仕方ないか……」ガリガリ

少年は足元に落ちていた石を拾うとそのまま食べた。

それから数日経ったある日の事……

「ハア……やつぱり何か普通に食べたいぜ……」

少年は腹の虫を鳴らしながら山中を歩いていた。

「何かを買おうにもこの世界の通貨を持ってないから無理だろうし……」

「えっ？……なんでこんな所に人がいるの？」

少年が山中を歩いていると白髪と赤髪の半分でオッドアイの少女がいた。

「ここは私のお父さんが使用してる特訓所なんだけど……」

「そうだったのか。悪かったな道に迷ったみたいで気付いたらここにいたんだ。じゃグギョルルル」

「えっと……もしかしてお腹が……空いてるの？」

「ああ、最近ロクなものを食べてなかったからな」

「良かったら…私の家で何か食べる？」

「俺は構わないけど……家族は大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫だよ……そうだ、私の名前は轟とどろき 雹火ひょうかって言うの」

「俺の名前は……アキ・レインディアって言うんだ」

2人は自己紹介をすると轟の家に向かった。

第2話 疑問

アキが電火の家に連れてこられて……

「ふう……ご馳走様でした。すみませんでしたこんなにご食べて」

「ううん、気にしないで 君みたいな男の子なら沢山食べるんだから」
アキが食事を終わると赤が入り混じった白髪メガネを掛けた女性が食器を下げて来た。

彼女の名前は轟とどろき 冬美ふゆみと言い電火の姉だった。

「あら、もう良いの？もつと食べて良いのよ？」

冬美が食器を下げて部屋を出ると入れ違いに肩までの長さの白髪髪の女性が入ってきた。

彼女の名前は轟とどろき 冷れいと言い電火の冬美の母親だった。

「いえ、これだけ食べさせてもらえれば充分です……それよりも大きな家ですね」

「ええ、ウチの旦那がそれなりに有名なヒーローなのよ」

「有名なヒーロー……ですか？」

「そうよ、No. 2ヒーロー エンデヴァーって言うの 聞いた事があるでしょ？」

冷とアキが話していると食器を下げた冬美が部屋に入ってきた。

「いえ、聞いた事が無いですね……それに……。ヒーローってなんですか？」

アキの言葉に3人が驚いていた時だった……

「おお、今帰ったぞ ん？誰だ貴様は……」

大柄で短めの黒髪を立てた男性が入ってきた。

彼の名前は轟とどろき 炎司えんじと言い電火と冬美の父親で冷の旦那だった。

「あつ、お邪魔してます。俺の名前はアキ・レインディアと言います」
「私が山の特訓所に行ったら迷い込んで空腹だったから家に連れてきたの」

「そうだったのか、俺の名前は轟炎司だ」

「ねえ、あなた燈くんは一緒じゃなかったの？」

「ああ、燈矢なら夏雄から電話が来て迎えに行っている」

「またなのー？全く、燈矢兄も優しいんだから」

「いや、ちょうど夏雄を迎えに行く方に用事があったからついでにだよ」

皆が話していると赤髪と白髪の2人の男性が入口に立っていた。

赤髪の男性は轟とじろぎ 燈矢、白髪の男性は轟とじろぎ 夏雄と、それぞれ言い燈

矢が長男、夏雄が次男だった。

「全く……燈矢も優しいのは良いがあまり甘やかさない方が良いぞ」

「分かってるよ父さん、今日は俺が頼んだんだよ」

「それよりも、父さん……その子って……ん？」

燈矢はアキを見てある事を尋ねた。

「なあ、君に聞きたい事があるんだけど……少し前にビッグマツスルって言う敵から女の子を助けなかつたかい？」

「うーん……そのビッグマツスルって言われてる奴が誰かは分からないですけど変な男に捕まってた女の子を助けた事はありますよ」

アキの答えを聞いた燈矢は炎司に耳打ちで話をした。

話を終えて……

「まあ、今回は君は人を助けたと言う事で【個性の無断使用】を大目に見る事にしたから安心すると良い」

炎司がアキにそう言うのとアキは軽く頭を捻って疑問に思っていた事を聞いた。

「あのー……聞きたいんですけど……その【個性の無断使用】って何ですか？俺はいつも通りに魔法を使っただけでですけど？」

今度はアキの言葉を聞いた轟家の面々が頭を捻っていた。

第3話 事情説明と模擬戦。

アキと轟家の面々が頭を捻っていると電火が話しかけた。

「ねえ、アキは魔法を使ったって言うんだけど……それがアキの個性なんだよね?」

「だから、その個性って言うのがわからないけどコイツは俺が親から教わった奴だぜ?」

「そう言えば、燈矢は何故彼の事を知っているんだ?」

「忘れたのか親父?あの事件は俺がインターンに行つてた事務所の近くで起こつたんだぜ?」

「そっか、少し前に燈矢兄はインターンに行つてたんだつたな」

「悪いがアキ君、君のご両親と話をしたいのだが連絡先を教えてくださいか?」

炎司がアキに気になった事を聞くと予想もしてなかつた答えが帰つてきた。

「あつ、俺の親はもういないですよ。400年前に亡くなりましたから」

「……えっ?」

「その……アキ君、その400年前って……本当なのかしら?」

「そうですね?……ああーっ、コレを話すには……皆さんからしたらちよつと信じられない事があるんですけど……」

「アキ……話してくれる?私は何を聞かされても信じるから……」

「まあ、いつかは話す事だから今話してた方が良いかもな……実は俺は……こことは違う世界から来たんですよ」

「……こことは違う世界って……本とかで読んだりする異世界って事で良いのかしら?」

「はい、冬美さんの言う通りですね」

「けど、アキが異世界から来たって言うても証拠が無いだろ」

「夏雄の言う通りだな……何か、それをそれが分かる証拠みたいな物は無いのか?」

「証拠みたい様な物ですか……まあ、証拠って訳じゃないですけど」

「……俺と戦ってみますか？」

「何？どう言う事だ？」

アキの言い方に炎司が眉を顰めた。

「まあ、簡単に言うとな俺の……魔導士としての力を見たらコッチの人達とは違うって事が分かると思っただんですよ」

「そんな事情なら俺が相手してやるよ」

燈矢がアキの提案を受けた。

「ならば2人ともこっちへ来るんだ」

炎司が2人を連れてどこかへ行くのを他の皆もついていった。

アキが炎司に連れて来られたのは家の敷地内にある道場だった。

「へえ、こんな場所まであるんですね……」

「これでもN.O. 2ヒーローだからな」

「そうでしたね……それじゃ炎司さんに審判をお願いしていいですか？」

「俺は構わないが、本当に良いのか？ 燈矢は俺のサイドキックをしているんだぞ」

「ええ、それくらいの相手の方が俺も力を見せれますから」

「ふーん、なんか、その言い方だったら俺と良い戦いが出来るって感じに聞こえるけどな」

「そうですよ、俺だって向こうの世界じゃそれなりに経験は積んでますから。俺はいつ初めても構いませんよ」

「俺だって大丈夫だぜ、親父っ！」

「ああ、では試合開始！」

「まずはコイツをくらいなっ！」ボウツ！

燈矢が右手から青い炎を発生させたがアキは難なく避けた。

「へえ、どうやら燈矢さんの個性はその炎って事ですか」

「ああ、コイツが俺の個性【蒼炎】だ！」ボウツ！ボウツ！

燈矢が火の玉を連射するがアキは普通に避けていた。

「オラオラ！かわしてるだけじゃ勝てないぜ！それにお前の個性は体を鉄にするだけだろっ!!」

「ああ、そうか……燈矢さんはあの場所にいたって言ってましたね……(まあ、アレも俺の魔法の恩恵の1つだけどね)」

アキはニヤツと笑うと燈矢に向かってきた。

「なっ！何をするかは分からないけど、そんな真っ正面から来た所でどうなるって言うんだよ!!」ゴウツ!!

燈矢はアキに向かって両手から炎を出したがアキは避ける事無く、そのまま突っ込んできたので炎にのまれた。

一方、それを見ていた人達は驚いていた。

「なっ!?アキ!」

「兄ちゃん!やりすぎだろ!!」

「父さん!早く止めないと!!」

「待て、何かおかしいぞ……」

「アナタ?おかしいとはどう言う事ですか?」

電火、夏雄、冬美が慌てている中、炎司は何かを感じており冷はそれを聞いた。

「あれだけの炎を受けていながら、何故、アキの体は立っているんだ」

炎司の言葉を聞いた子供達がアキを見ると崩れる事無くそのまま立っていた。ムシャ……

「ん?ねえ……何かアキの方から聞こえてくるんだけど……」ムシャ……ガブ……

電火の言葉を聞いた全員がアキを見るとアキが青い炎を食べていた。

「なっ!?嘘だろ……」

「ふう……ご馳走さん、コツチの世界に来て初めての炎を食べたけど、なかなか美味しい炎でしたよ」

「どう言う事だ?お前の個性は体を鉄にするだけじゃなかったのか!!」

「確かに俺は体を鉄にする事は出来ますよ、こんな風に」

アキは右腕だけを鉄にすると普通の腕と同じ様に自由に動かしていた。

「そうだ、言い忘れてました。元の世界で俺は魔導士ギルドって所に

所属してました。

そして、ギルドでの俺のランクはギルド内でも数人しかいないS級魔導士です」

「なるほど、それなりの実力はあるって事か」

「更に言うとな俺は大陸中で優れた10人と言われているせいってんだいまどう聖十大魔導の1人でした」

「なっ！つまりアキは選ばれた存在って事か……面白え！」ゴウツ！

燈矢は不敵な笑みを浮かべると今までの中でも最大の炎を出した。

「おいっ！燈矢何をしている!!それほどの火力を出したら自分の体にも影響があるだろう!!」

「分かってるよ……親父……コレは今の俺の限界を知りたかったからだ……って……コイツも食っちゃまうのかよ……」

炎司に怒鳴られた燈矢は床に座り込みアキは発生した炎を食べていた。

「負けだ負けだ、俺の負けだ……アキ、良い戦いが出来て良かったぜ」
「俺も久し振りに美味しい炎を食べさせてもらいましたよ……それで俺の言った事は信じてくれますか？」

「うむ、あれほどの実力を見せられては信じない訳にはいかないな……そう言えばアキは、これからどうするんだ？」

「そうですねえ……まあ誰も知ってる人がいないんで、そこら辺で野宿でもしますよ」

アキと炎司が話していると雷火が冷に耳打ちしていた。

「ねえ、お母さん……良かったら……」

「そうね……ねえアキ君、アナタが良かったらなんだけど……私達の家はどうかしら？」

冷は雷火に言われた事をアキに提案した。

「いやー……そう言ってくれるのはありがたいんですけど……他の人達は……」

「俺は賛成するよ……アキがこうやって相手をしてくれたら俺はもっと強くなれるからな」

「私も賛成するわ。アキ君みたいな子が野宿してるなんて、ちよつと

……」

「俺も構わないぜ新しい弟が出来たみたいだからな！」

「うむ……子供達が賛成ならば俺が反対する理由も無い」

「そうですか……じゃあ、今日からここでお世話になります」

アキは轟家の新たな家族となった。

第4話 新たな生活と強さの意味

アキと燈矢の模擬戦?が終わった日の翌朝……

「うーん……あ、おはようございます冷さん、冬美さん」

「あ、おはようアキ君」

「今、朝ご飯を作ってるから燈矢と夏雄を起こしてきてくれるかしら？」

「はい、分かりました」

アキが居間に入ると朝食の用意をしていた冷に用事を頼まれたので、そのまま用事を済ませに向かった。

暫くして、アキが燈矢と夏雄を起こしに行くと電火も起きていたので皆で朝食を開始した。

「冷さんのご飯はやっぱり美味しいですね」

「そう言えば……アキは、私に会う前は何を食べてたの?」

「んあ?ああ、電火に会う前までは木の実とかキノコ、魚を釣ったり野生動物を捕まえたりだな」

「まあ、アキの力なら、それ位簡単だろうな……なあアキ、朝飯食い終わったら良いか?」

「ええ、俺は構いませんよ燈矢さん」

アキは朝食の後に燈矢との手合わせをする事になった。

朝食後、アキは燈矢、電火と一緒に訓練所に来ていた。

「さてと今回はどうしますか?燈矢さん」

「そうだな……30分勝負でどうだ?」

「ええ、燈矢さんが、それで良いなら俺は構いませんよ、電火は時間と開始の合図を頼む」

「うん、分かったよ……それじゃ……初めっ!」

2人が距離を取って位置についたのを見た電火は合図を出した。

「喰らえっ!蒼炎!!」

「火竜の鉄拳!!」

「チッ!やっぱりアキの炎は、なかなかだなっ!!」

「燈矢さんの炎もですよっ!!火竜の咆哮!!」

「蒼炎波!くっ!俺だつてそれなりに経験は積んでるんだけどな!!」

「それは俺も分かりますよ、けど、それを加味しても俺の方が強いって事ですよ!火竜の翼撃!!」

アキと燈矢は模擬戦を行なっていたが、アキの技を受けて燈矢が吹き飛ばされて終わり電火が駆け寄った。

「それまで!燈矢兄、大丈夫?」

「ああ、多分だけどアキが手加減をしてくれてたからな」

「燈矢さん、どこか痛い所があるなら治療しますよ?」

「特に無いから平気だ……それよりもアキは何か回復させる事が出来るのか?」

「ええ、俺は複数の魔法を教わったから回復魔法も使えるんですよ、だから」

アキが燈矢の火傷に手を翳すと緑色の光が出て火傷の治療をした。

「こんな風に出来るんです」

「ふーん、結構便利な物だな」

「あれ?ねえ、アキ、その左腕にあるfの文字みたいな奴って何?」

アキが治療してる時、電火が袖から見えた物に気付いた。

「ん?コイツか……コイツは俺がいた魔導士ギルド妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章だ……」

アキが電火に見せたのはアルファベットのfの下が尻尾の様になった虹色のマークだった。

「コレは俺がギルドに所属してる証で……仲間達との絆でもあるんだよ……」

「そうなんだ……ねえ……アキは元の世界に戻りたいの?……」

「ん?そうだな……戻れるなら戻りたいけど、今はまだ良いかな?」

アキは紋章を愛しそうに触っていた。

「俺がここにいるのには何らかの理由があるからだと思う……だから俺は、まだ戻る気は無いよ……」

「そうか……強いなアキは……」

「いえ、俺は強くないですよ……」

「え？それだけの力……魔法が使えるのには？」

「2人からして俺が強いと見えるなら……『恐怖は悪では無い』って事ですかね」

アキが言った言葉の意味を雹火と燈矢が考えていた。

「それは己の……自分の弱さを知るって事です……弱さを知れば人は強くも優しくもなれるんですよ……」

「己の弱さを知る……か……」

「ねえ、アキ……私も強くなれるかな？」

「それは俺には分からない……雹火が目指すのが、どんな強さかによるからな」

「あつ、アキ君、悪いけど買い物に行くから着いて来てくれる？」

3人が話していると冷が用事を頼んできたので一緒に行く事にした。

第5話 怒り。

アキは燈矢との手合わせを終えると冷と買い物に来ていた。

「えーつと、次はアツチのスーパーに行つて……」

「冷さん、すみません、俺がいるから、その分お金とかかかつて……」
「子供は気にしなくて良いのよ……まあ、以前のアキ君を知っていると何とも言えないけど……」

「そうだ銀行に行かないといけないんだったわ アキ君はココで待つててくれる？」

「俺も一緒に行きますよ、コツチの世界に慣れないとダメですから」

「そうね、なら一緒に行きましょう」

冷はアキと一緒に銀行に向かった。

銀行でアキが冷と一緒に窓口で待つてる時だった……

「おいっ！テメエら静かにしやがれ!!」

数人の男性達が拳銃などの凶器を持って侵入して来た。

「冷さん、コツチの世界じゃあんな奴らつて普通に居るんですか？」

「いえ、あの人達は犯罪者よ。多分ここにあるお金を奪う為に来たみたいね……」

「そうですか……なら容赦しなくても良いですか？」

「いえ、それは今はまだやめといた方が良いわ……他の人達もいるから」

「おいっ！そこで何をコソコソ話してるんだ!?こつちに来いっ!!」

2人が話していると強盗犯の1人に他にいた人達と一緒にされた。

アキ達は一緒にされるとロープで縛られた。

「それにしても……なんで、アイツらは……」

「どうかしたの？アキ君」

アキが何かを考えていると冷が声をかけた。

「ええ、何かおかしいんですよね……アイツらがここに入ってきた時に誰も止めなかったのがおかしいんですよね……」

「そう言えば、そうね……彼らの中の誰かの個性が関係してるんじゃない」

ないかしら?……」

「おいっ! 変な事を話してるんじゃないやねえぞ!!」

(全く……。「冷さん聞こえるんならウインクしてくれませんか?」)

アキは黙ると冷にテレパシーを行い、それを聞いた冷は言われた通りにウインクをした。

(冷さんはテレパシーが使えないから俺からしか話しかけられませんが、俺の考えじゃこの中にコイツらの仲間がいる感じですよ……)

アキが言うと冷は軽く驚いていた。

そんな中……

「兄貴! 警察達が取り囲んでるぜ!!」

「へっ! 警察が来た所でこれだけの人質がいるから問題ねえ!! オラ! こっちに来い!!」

強盗の1人が人質の中から1人の少女の手を掴んだ。

その少女は黒髪のおカツパで耳たぶがイヤホンジャックになっていた。

「くっ! 離せよ! 私に何をするんだ!!」

「お前を殺すって言えば警察も言う事を聞くだろうよ!」

強盗が少女に拳銃を向けた。

「ケツ、そんな物を持ってながら何の抵抗も出来ない女の子に手を出すなんてクズはクズって事だな」

「なんだとっ!? ガキが舐めた口聞いてんじゃないやねえよ!!」

「だったら、テメエから殺してやるよ!」バン!

強盗が拳銃を撃つとアキの顔に当たってそのまま仰け反り、それを見てた少女が涙を流した。

「あ……私が捕まったから……」

「安心しな、お前も直ぐに「おいおいおい、終わったって思うのは早過ぎるんじゃないのか?」なんだと!」

声が出たので少女と強盗を見るとアキは歯で噛んで弾を止めていた。

「なっ!? 噛んで止めただとっ!!」

「別にこんな事位で驚く事も無いだろう、この位じゃ腹も膨れないか

「からお前に返すよ」パシン！キュン！

強盗が慌てている中、アキが弾を指で弾き飛ばすと、そのまま持っていた拳銃に当たり落とした。

「早く！そいつから離れるんだ!!」

「ツ！そうだ、出来るだけこいつから距離を取らないと!!」

「クソツ！そうはさせるかよ!!」

「それはこっちのセリフだ！ホワイトドライブ!!」シュン！

強盗が再び少女を捕まえようとした時だった、アキが魔法を唱えると体が白く輝き2人の間に入り込んだ。

「なっ!?なんだ！この速さは!!」

「テメエに言う義理はねえ！白竜の爪跡はくりゆうのそうせき!!」

アキが強盗の腹を殴ると白い紋章が浮かび、そのまま動けなくなつた。

「冷さん！後ろの紫髪の女性を凍らせてください!!」

「ええ！分かったわ!!ハッ!!」

アキの指示を受けた冷がその通りにすると女性は顔を歪ませながら凍りついた。

「しまった！ボスが見つかった!!」

「早く逃げるぞ!!」

「そうはさせないよ！ホーリーレイ!!」

強盗達が逃げようとしたがアキが両手から無数の矢の様の閃光を出して鎮圧した。

その後、警察達とヒーローが中に入って来たが……

「おい！君が何をしたか分かってるのか!？」

強盗達が連行されていく中、アキがヒーローの1人に叱られていた。

「ん？ただ、俺は強盗達を始末しただけだけど？」

「しただけだど？ふざけるな！少し間違えたら人質が殺されてたかもしれないんだぞ!!」

「ふざけてるのはどっちだよ？アア？」

雰囲気の変わつたアキに睨まれたヒーローは黙った。

「大体、お前がちやんと見回ってたらこんな事は起きてなかったんじゃないのか？」

「そ、そうは言うが……私には他にもやる事が……それに強盗達と私の個性では相性が……」

「やる事がある？相性があるだ？ ふざけんじやねえ！」

黙っていたヒーローが反論したが、それを聞いたアキは大声を上げた。

「相性があるって言うならそれを覆す為に何かしろよ！何もしてない癖にゴチャゴチャ屁理屈捏ねてんじやねえ!!」

「このクソガキが！ヒーローを舐めてんじやねえぞ!!」ほう、俺が保護してる子に何をする気だ？」誰だ！なっ!!」

ヒーローがアキを殴ろうとしたが誰かに手を止められたので誰か確認しようとしたらエンデヴァーがいた。

「話は聞いていたが、お前はそれでもヒーローなのか!!アキの言う通り相手と相性が合わないのならどうするか考えるべきだろう!!」

ヒーローはエンデヴァーに説教されて落ち込んだ。

その後、アキ達は家に帰ったが……

「もうアキ君、お母さんから聞いたけど無茶をしたらダメだよ？」

「アキが強いのは分かるけど、ケガでもしたら私は悲しいよ……」

「はい、すみませんでした……」

「ハハハッ、アキには冬姉のお叱りの方が効くみたいだな」

「それと電火のあの顔もな」

事情を聞いた冬美に叱られ、電火の悲しげな表情を見たアキは土下座しており夏雄と燈矢はそれを見て笑っていた。

第6話 不審者。

銀行強盗と事件から少し経ったある日……

静岡にある小学校で……

「えーっと、アキ・レインディアと言います。皆さん宜しくお願ひします」

アキが転入しており……

(やった！アキと同じクラスになれた!!)

同じクラスにいた電火が喜んでいた。

「それじゃ、レインディアは空いている席に座ってくれ」

アキが座ったのは電火の隣の席だった。

その日の放課後、アキは電火と一緒に下校していた。

「うーん……こつちでの勉強は向こうとは違うから結構苦勞するなあ……」

「そうなんだ、向こうじゃどんな勉強があつたの？」

「あつちで習つたのは、普通に人と話す為の言葉と簡単な計算位だったな、それと歴史を少しかな？他にもあると思うけど俺はこんなもんしか習ってないんだ」

「じゃあ帰ったら私がコツチで学校で習う教科を教えてあげようか？」

「俺は良いけど、電火は良いのか？」

「ダメだったら、こんな事言わないよ？」

電火はアキの疑問に首を傾げて答えた。

「そうか、なら頼むよ、その代わりに俺が今出来る事で、何でもしてやるから」

「アキ！それって本当!?!」

電火はアキの言葉を聞くと首をグルンと回して顔を見た。

「ああ、俺が今出来る範囲でならな、電火？」

「アキが今出来る事は……2人きりでデートに行くか、それとも……」

電火は小声で何かを言っていたがアキはそれを聞き流して一緒に帰宅した。

「……彼は……私が考えてる者ならば、コレを知っている筈です……」
何者かが2人を物陰から見ている事にも気付かず……

アキが学校に通う様になって日にちが経ったある日の事……

「じゃあ行つてきます」

学校に登校する前に冬美が声を掛けてきた。

「ああ、2人とも最近、不審者が出て来てるって町内会で言われてるから気を付けてね」

「不審者って、何か特徴みたいのはあるんですか？」

「特に被害とかが出てるって訳じゃないんだけど……ある事を言ってるんだよね」

「姉さん、ある事って何？」

「うん私が聞いた話だと……【妖精に尻尾はあるのかないのか】って言い回ってるみたいだよ」

「なっ！冬美さん！それって本当ですか!？」

その言葉を聞いたアキが冬美に詰め寄つたのを見て電火は戸惑いながら尋ねた。

「う、うん……そうだよって……アキは何か知ってるの？」

「ああ、その言葉を俺は、いや俺達、そのギルドにいた皆が忘れちゃならない物なんだ……」

「え？アキが言う、そのギルドって、まさか……」

「アキ君が本来いた世界にいた時に所属していたって言う……」

アキの言葉に電火と冬美はある事に気づいた。

「そう……その言葉は俺がいた魔導士ギルド……【フェアリーテイル妖精の尻尾】の創設者が言った言葉なんだ……」

「待ってよアキ、ならこの世界にもアキがいた世界から来た人が他にもいるって事？」

「そう言う事になるな……冬美さん、その不審者が現れた場所ってどこか分かりますか？」

「うん、確か、この辺りだよ」

冬美はアキに町内会の地図を見せて場所を教えた。

「ここら辺なら……じゃあ「私も行くよアキ」電火？」

電火はアキが何をするか分かったので自分の考えを言うとアキはキョトンとした。

「だって、アキはその人を探しに行くんでしょ？私も一緒に行きたいの……」

「電火がそう言ってくれるのは嬉しいけど相手が何者かも、分からないんだぞ？」

「だったら俺も一緒に行くぜ」

誰かの声があったので見ると燈矢が立っていた。

「燈矢さん」「兄さん」「燈兄」

「俺なら免許も持ってるから個性を使用しても、そんなに煩く言われないからな」

「燈矢さん……分かりました、俺と一緒に着いて来てください。電火もな」

アキは頭を下げて2人に頼み、2人は笑ってその提案を受け入れた。

その結果3人は不審者を探しに向かった。

「あぁーっ学校に欠席の連絡を入れないとなぁ……」

冬美はアキと電火の学校に連絡を入れた。

第7話 謎の人物。

学校ズルを自主休休講みしたアキと電火は燈矢と共に不審者がいたとされる場所に来ていたが……

「アキ、この辺りか？」

「そうですね燈矢さん、俺が冬美さんに聞いた話だとこの辺りなんですけど……」

「特に何も無いよね……」

そこは町外れにある少し高めの木が一本生えた原っぱだった。

「燈矢さんに聞きたい事があるんですけど……ここら辺はパトロールの範囲に……」

「ああ入っているぞ、けど見る限りいつも同じだな」

「私も何回か来た事はあるけど昔と変わった場所とかは見当たらないよ?」

「そうなのか……だったら……なんで、その不審者はあの言葉を知ってたんだ……」

アキが考えながら木の傍に近づいた時だった……

t r a n s p o r t

木を中心にして足元に魔法陣が発生してアキ達を飲み込んだ。

「なっ!?なんで術式魔法が!!燈矢さん!電火を連れてここから離れてください!!」

「ああ!ガツン 何か壁みたいな物があるぞ!!」

「アキ!これって一体何!?!」

燈矢がアキの指示を聞いて電火を連れてその場から離れようとするが何かに遮られていた。

「クソッ!この術式魔法は中に入った者達をどこかに転送させる物みたいだ!!このままなら……電火!燈矢さん俺の手を掴んで下さい!!」
アキが両手を差し出すと電火は右手、燈矢が左手とそれぞれ握った。

その瞬間3人の姿はそこから消えていた……

姿が消えた3人は気がつくや遙か上空に出現していた。

「なっ!?ここはどこだ!!」

「そんな事より、このままなら私達はどうなるの!?!」

「2人とも、そのまま俺の手を掴んでください!!翼^{エーラ}発動!!」

アキは2人を掴んだまま背中から翼を出して少しずつ落下スピードを落としていった。

「ハアハアハア……大丈夫ですか?」

「ああ大丈夫だ、ありがとうなアキ」

「それよりもアキの方こそ大丈夫なの?疲れてるみたいだけど……」

「これ位、問題ないよ、今の俺じゃ2人分の重さがキツかったただけだからさ……。それにしても、ここは一体?……なっ!?!」

燈矢がお礼を言つて電火が心配してる中アキが周りを確認していると雲が切れて何か島があつてそれを目にした時にこの世界にはあり得ない物が目に入った。

それは島の中心に立っている巨大な一本の木だった。

「嘘だろ?……なんで……アレがここに……まさか、ココは……」

「アキ、どうしたの?」

「その感じからすると、この場所を知ってるみたいだけど、何処なんだ?」

アキが戸惑っている事に気づいた電火と燈矢が尋ねた。

「ここは俺が所属していた魔導士ギルドの魔導士達から聖地とされていた場所……天狼島てんろうじまと呼ばれている所です」

「待つてよアキ!じゃあここはアキが本来いた世界だつて言うの!?!」

「そうだと思うが……何でここに飛ばされたんだ?……!電火!!」

アキが電火と話していると何かを感じたので抱き抱えてその場から離れると同時に何者かからの攻撃が来たので相手を確認すると黒いローブを纏った人物がいた。

「おい……お前は何者だ?……電火、大丈夫か?」

「う、うん大丈夫だよ……(ウワア、アキの顔がこんな近くにあるよー)」

「そうか、燈矢さんも大丈夫ですか?」

「ああ、アキが避けた時に俺も反射的に動いたからな」

アキが燈矢に聞くと少し離れた所で服についた砂埃などを払い取っていた。

「けど、噂になってる不審者はアイツらみたいだな」

燈矢が視線を向けると黒ローブの人物の後ろから他に2人の人物が姿を見せた、その者達もローブを纏っていて前に出るなと言う様に手を横に出した。

「面白れえ、最初からいた奴が1人で相手をするって意味みたいっすね……だつたら、こつちも俺が行かせてもらいます!!」

「ちよ、ちよつと待ってよ!アキ!!燈矢兄!私達も行こう!!」

「いや、俺たちは行かない方が良い、向こうのアイツらが何をするか分からないからな」

電火がアキの後に着いて行こうとしたが燈矢が止めて残りの2人を見ていた。

第8話 正体。

アキはローブの人物に向かいながら攻撃を加えた。

「テメエが何者で何で居るか知らねえけどよ！この島から出て行きやがれ!!火竜の咆哮!!」

「……フンツッ!」ジャラジャラジャラ!!

「何だ?!この魔法は……まさか!?グワツ!!」

アキが口から炎を出して攻撃するがローブの人物は右手の人指し指と中指を前に出すと魔力の鎖を出してアキの両手を縛るとそのまま振り回して投げ飛ばした。

「チツ!もしかしたらテメエは……いや、考えてる余裕はねえか!雷竜方天戟!!」

「ハアツ!!」

「今のは……やっぱりな……なら……」

アキが雷で作った武器を相手に投げたが破壊されて逆に攻撃が来たが、そのまま受けて爆煙が巻き上がった。

「アキ!?何で……」

「おいっ!お前らは一体何者で目的はなんだ!!」

「まあ待てよ2人とも、アイツは今ワザと攻撃を受けたみたいだぜ」

「ええ、彼はどうやら気づいたみたいね」

電火と燈矢がローブの2人に声をかけるが2人はアキが何をしたか説明していた。

「なんだと?何でアキがそんな事をするんだよ!!」

「そうだよ!燈矢兄の言う通りだよ!!」

(簡単だよ電火、燈矢さん……それは俺の事を確かめたかったからだよ……)

爆煙が晴れると氷の壁で攻撃を防いだアキが立っていた。

「アキ!無事だったんだ!!良かった……」

「ごめんな電火、心配をかけて」

「けどアキ、何でワザとアイツの攻撃を受けたんだ?」

アキが近づいて電火に頭を撫でると安心したのか泣いていて燈矢

は理由を聞いた。

「彼が俺の考えてる人なら、傷付ける様な事はしないと買ったからですよ……そうだろう？」

「ふむ、やはりお前だったのか……魔導士ギルドフェアリーテイルの魔導士、アキ・レインディアよ」

「ああ、久し振りだな。フェアリーテイル2代目ギルドマスタープレヒト」

アキが自分に攻撃をして来た人物に心当たりがあり、その人物の名前を言うと相手はローブを脱いでその正体をばらした。

その顔は金髪のオールバックにツリ目で右目に眼帯をしていた男性だった。

「アキ……フェアリーテイルって確か……前に話してくれた……」

「ああ、俺が生きていた時に所属していたギルドだ、それで何で、ここに居るんだ？」

「うむ、それは俺にも分からない……お前は知っているんだろ？私はどうなったのか……」

プレヒトの言葉にアキは苦笑しながらうなづいたので、その後は話さなかった。

「それよりもアキ、お前が生きていた時と言っていたが……お前も……」

「ああ、俺も命を落としたんだよ、仲間達を守る為にな」

「やはりな……それでお前もこの世界に来たと言うのか……それで私がこんな事をしたのは頼まれたからだよ」

「ん？頼まれたって誰にだ」

「それは私ですよアキ」

アキがプレヒトに理由を尋ねると何処から声がしたので見ると地面まで届く程のパーマがかかった金髪で白いローブの様な物を纏った少女が少し離れた所に立っていたがアキにとっては懐かしい人物だった。

「あ、あなたは……まさか……フェアリーテイル初代マスター……メイビス・ヴァーミリオン……」

「はい、久し振りですね、アキ」

アキに声をかけられたメイビスは花が咲いた様な笑顔でアキを見るとアキは両手と膝について泣いていた。

「メイビス……済まなかった、あの時俺が……俺が……」

「アキ……あなたは何も悪くありません……アレは私が望んだ事なのですから……」

メイビスはアキに近づくと優しい声でアキを慰めた。

その後……

「そうですね……メイビスも気付いたら、この世界にいたんですか……」

「ええ、私はあの時に命を落しました……それで気が付いた時には、この世界にいました……あの人と共に……」

アキはメイビス達に島内に会った遺跡跡に連れてこられて事情を聞いていた。

「え？あの人ってまさか……」

「ああ、僕の事だよ」

アキが誰か心当たりがあったのでその者の事を聞こうと思ったら入り口から黒髪に黒い服を着た青年が入ってきた。

「やつぱり、お前だったのか……黒魔導士ゼレフ……けどお前は確か……」

「うん、アキ、君の思ってる通り……僕はあの時に彼女と……メイビスと共に命を落としたんだ」

ゼレフは歩みを進めるとメイビスの隣に座った。

「ゼレフ……お前もここに來てたのか……けど、そうやっているって事は……」

「そうだよ、一度命を落とした事でアंकセラムの呪いは解かれていますんだ……だからこそ」

「ふえっ!?な、何をするんですか!!」

メイビスはゼレフに抱き抱えられるとそのまま膝の上に乗せられて顔を赤くした。

「なるほど、そう言う理由だったから俺達がこんな近くにいても大丈夫

夫って事か」

「ねえアキ、近くにいっても大丈夫って……」

電火は気になった事をアキに聞いた。

「ああ、俺が知ってるゼレフは呪いに掛かってたんだよ アンクセラ
ム呪いって奴に簡単に言うのと近づくと死ぬってな」

「なっ!?!じゃあ俺たちは……あれ?なんで、まだ……」

「それは今はもう呪われてないからだよ……エンデヴァアのサイド
キツクの轟燈矢君?」

「俺の事を知っているのか?」

燈矢は自分の事が知られている事に驚いていた。

「ああ、これでも有名なヒーローやヴィランの情報は調べているから
ね……そろそろ僕たちも元の世界に戻ろうか」パチン

ゼレフが指を鳴らすと、そこにいた皆がその場から姿を消した。